

「野宿者問題」の対象把握

「寄せ場」をめぐる先行研究からの検討

西田 心平*

いわゆる「バブル経済」の崩壊以降、日本の大都市を中心として「野宿者」が急激に増加している。こうした人々の路上の生活スタイルや原因論をめぐる、マスメディアなどを通して様々な説明がなされてはいるが、本質的な存在形態をめぐる議論には至っていない。本稿のねらいは、社会の底辺層とりわけ「寄せ場」の問題に取り組んできた先行研究を検討し、「野宿者」として語られる対象を社会学的に把握していくことにある。まず、これまでは主に「解体地域」というスティグマの克服を課題として寄せ場への社会的な差別や貧困問題の実態を明らかにすることが主流であったことを確認する。そのうえで、都市下層として規定される寄せ場の日雇労働市場としての衰退を、70年代後半以降の産業構造の変容とのつながりであらえ、かつて寄せ場の日雇労働者であった人々が野宿者となっていくプロセスをたどる。こうして「野宿者問題」は、あくまでも高度経済成長以降から変容していく寄せ場との関連においてとらえなければならないことが示され、都市下層としての野宿者という枠組みで把握していくことの必要性が述べられる。

キーワード：寄せ場，社会解体，貧困化，被差別の意味世界，都市下層，野宿者

目次

はじめに

寄せ場をめぐる言説

1. スラム研究 「解体地域」というスティグマ
2. 貧困研究 「沈黙層」としての日雇労働者
3. 差別問題研究 被差別の意味世界
4. まとめ 都市下層としての寄せ場
「野宿者問題」の対象設定
 1. 日雇労働市場としての釜ヶ崎
 2. 階層としての「野宿者」
寄せ場機能の変容にともなって
3. 野宿の実態とその類型

おわりに

はじめに

本稿の目的は、社会の底辺層の人々の諸問題をめぐる顕著な事例である「野宿者問題」について、そこでの対象を社会学的に把握していくことにある。近年、大都市を中心としていわゆる野宿者の急激な増加が、マスメディアなどを通じて盛んに伝えられている。それとあわせて、シェルターや自立支援、あるいは強制的な排除などを含めた対策の議論も社会的な関心を引きつつある。

しかしながら一方で、そこで対象となる人々はどうのような存在として規定することができるのか、どのような人々が野宿という状態を強い

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

られるまでに至っているのか、といったことをめぐってはいまだ整理した議論がなされているとはいいがたい。問題がセンセーショナルにとらえられるあまり、それに突き動かされるように一方的な問題解決の方向が模索されているようにみえる。

野宿生活を強いられている人々の多くは、かつて寄せ場の日雇労働者であった場合が少なくないといわれている¹⁾。数年前には、東京の山谷や大阪の釜ヶ崎などの簡易宿泊所で生活を営んでいたが、いわゆる「バブル経済崩壊」以降、急激に仕事が減少し結果的に野宿生活を余儀なくされているというケースである。つまり、日本社会における高度経済成長期以降の労働市場の変容に伴い、日雇労働市場としての寄せ場からも排除された人々が、現在の野宿者の本質的な存在形態なのではないかと思われるのである。

本稿ではまず、戦後の寄せ場を主題とした先行研究の動向を検討していく。寄せ場をめぐる研究の言説をたどりながら、対象把握の変遷を明らかにしつつ到達点としての社会学的な認識枠組みについて検討する。そのうえで、大阪の釜ヶ崎を事例として、そこでの寄せ場機能の変容と衰退、それに伴う高齢の日雇労働者を中心とした野宿生活への移行の実態をたどりながら、現代の日本社会における「野宿者問題」の対象の設定と問題の所在を明らかにしていきたい。

釜ヶ崎とは、西成区でも主に萩之茶屋1丁目から3丁目、ないしは太子1丁目あたりを含んだ約0.62km²のごく小さな地域をさす。その外縁にはJR環状線と南海線、それから地下鉄御堂筋線が走り、街のなかを東西分けるように阪堺線が延びている。地域を無数に縦断する通り

には、木造賃貸住宅、簡易宿泊所、アパート、食堂、弁当屋、銭湯、コインランドリー、散髪屋、リカーショップ、居酒屋、商店街などがひしめくように軒を連ねる。筆者は、この地域の周辺で野宿生活をしている人々へ継続的なインタビュー調査を行っている。彼らの生活は、明らかに構造的な失業問題と結びつきながら、その延長線上でいや応なく野宿の状態に着地せざるを得なかったという現実を物語る。だが、その「なれの果て」とも映る現在の日常は、本人にとっては同時に生きていくための固有の生活が展開される場でもある。

これまで出会ってきた野宿生活の多くには、その細部において個々人の固有の暮らしの流儀が無数に埋め込まれていた。筆者は、「そこに住んでいる」ということの固有の必然性と主張、そして都市の現実を生き抜くための仲間とのつながりや相互の摩擦といった状況の細部をめぐる記述的な研究が必要であると考えている。本稿の試みはその前段階として、構造的な背景を踏まえた具体的な対象の確定と枠組みの設定として位置づけられている。

寄せ場をめぐる言説

1. スラム研究

- 解体地域というスティグマ -

戦後、釜ヶ崎などの地域は戦災被災者らによるバラックや闇市によって下層社会として蘇っていく。しだいに労働者が多く暮らすドヤ街へと変化していくが、依然スラム的な様相は持ち続けていた。シカゴ学派の影響を受けた1960年代の都市社会学者たちにとって、こうした地域の実態は主要な関心の対象となる。彼らにとって下層社会を理解するうえでの理論的な根拠

となったのは社会解体論であったが、そこでは当該社会集団の貧困さの中身に加え、「社会的偏倚現象」の解明により焦点があてられていた。

磯村英一氏は、社会病理現象は社会解体のプロセスとして把握できるとして、日本のスラム地域における解体のプロセスは偏倚現象であると規定する²⁾。また大橋薫氏は、エリオットやメリルの著書から解体論的アプローチについて以下のように解説している³⁾。

社会解体 Social Disorganization は社会集団の崩壊の過程であり、社会的問題事象とは、或る特定の状況を望ましくないとし、だが、適切な社会立法によって改善出来ると考える、社会的価値判断の結合現象をいうわけであるが、Social Disorganization Approach にあつては、一切の社会的問題事象を、社会的解体との関連に於て理解しようとするのである。

この当時の社会解体論に対する見解は、両者の見解が必ずしも一致していたわけではない。だが、社会病理と個人病理の関係をめぐっては、「社会的解体はその半面に個人解体を伴う」⁴⁾ものとされ、むしろ「社会解体的方針のなかでは、集団の側よりも個人の側に焦点をおいて考察するもの」⁵⁾とされた点において問題意識を共有している。つまり、個人ないしは社会集団の病理現象に光を当てるのが、そのまま社会解体を測るうえでの判断基準になるという理解である。

そこでドヤ街としての釜ヶ崎地域に向けられる関心も、もっぱら日雇労働やパタヤ、売春などを含めた逸脱的な職業形態やそこでの構成員がいかに「社会的偏倚」を示すのかという点に注がれている。大橋氏は『都市の下層社会』の

なかで、スラムの住民を経済的破綻者と反社会的行為者にカテゴリー化したうえで、釜ヶ崎で暮らす労働者の社会的性格について以下のように述べる⁶⁾。

ここに落ちて来た社会的落伍者の多くは、もともと一くせのあるものである。なかには普通のパーソナリティの持ち主もいるが、ほかは、気儘、横着、虚栄、そしてバクチや女や酒の好きなものが多い。実際、ここの風習には、一般から偏倚した面がいちじるしく強い。...このような条件のもとでは、普通人間でも自制することはむずかしいのに、ましてや歪んだパーソナリティの持主の場合は、歪みも一そう大きくなる。

さらに売春や麻薬密売、ノミ行為、やくざ集団などの存在についてもふれながら、いかにこの街の病理現象が著しいのかを示そうとする。そこでの意味づけや言説は、あまりにも素朴な印象として語られるにとどまるのである。つまり、地域に対する通俗的な偏見が、自己反省を踏まえることなく科学的な言説となって付与されていく危険性を伴っていたといえる。こうして釜ヶ崎は、社会病理学にとって「解体地域という名にふさわしい街」であり、病理現象を研究対象とするうえで格好の材料として位置づけられていくのであった。

ではこうしたアプローチから、解体現象に対してどのような政策的な展望ないしは治療的措置の方策が見いだされていったのか。大藪氏は「愛隣地区」において地区全体の開発よりも病理性を背負った流入者個人の社会的類型に適合した「人間開発」の方向性を主張する。

その類型として、流入形態、家族形態、居住形態にそれぞれ着目し、「押出・世帯・定着型」「吸引・単身・流動型」「侵入・集

団・流動型」「漂着・単身・定着型」の四つが中核であるとしている。そして、それぞれに対応した病理性をめぐっては社会解体的病理、労働疎外的病理、逸脱行動的病理、精神障害的病理としてカテゴリー化していくのである。

それらに向けた対策のあり方として、社会解体的病理に対しては、暖かい近隣関係の回復、集团的協力体制の形成を目標とした福祉コミュニティの建設を、労働疎外的病理に対しては制度化された雇用ルールの設定を、逸脱行動的病理や精神障害的病理に対しては更正保護事業や障害者対策事業の強化をそれぞれ提唱している⁷⁾。

ある現象や対象をめぐって病理だと判定を下すことは、単なる認識の問題にはとどまらない。一定の状況を定義し、それに対する政策展開にも影響を与えることになる。一般社会の側に立つ研究者の価値基準が暗黙の前提とされることで、ここで拾い出される現実には犯罪や精神病、アルコール依存などといっしょくたにされながら社会病理の文脈に置きかえられていく。それは同時に、「異質な社会」に対する行政権力を背景とした矯正的な観点からの対応・対策の発想しか生み出しえないということでもある。

2. 貧困研究

- 沈黙層としての日雇労働者 -

高度経済成長期において山谷や釜ヶ崎は、とりわけ建設資本にとって欠くことのできない「雇用調整クッション」としての役割を担う。これに伴って重層の下請構造での搾取にあえぐ日雇労働者の貧困が、一種の社会問題として浮上していく。そうした状況を背景に、江口英一氏等の労働経済学者は、山谷の日雇労働者に関する調査研究に基づいて失業の「窮乏化法則」

を解明し、「異質な社会」を「近代的貧困」の問題としてとらえ返すのである。

ただし、調査対象としての労働者階級はあくまでも経済主体としての側面からのみ把握されるにとどまっていた。すなわち経済合理性において、日雇労働者はあくまでも「最下の沈黙層」としての階層的地位へと固定化されていくのである。

江口氏等は、山谷や釜ヶ崎などのドヤ街を全国に広がる膨大な不安定層の流動化や貧困化のあり様が最も露骨に体现された社会的装置として理解する。すなわち、『底辺』の『賃金労働者』を『住所不定』者＝浮浪者たらしめ、公的な扶助・救恤なしには、もはや生きさえ不可能な、最下の「沈黙層」＝「窮迫民」を生み出す一つのスクリーンである⁸⁾と。その上で、山谷に向けたアプローチの課題として、産業予備軍としての日雇労働者をめぐる「転落」と「没落」の「社会的形成過程」、ならびにその受け皿として形成された山谷労働者の一般的性格に焦点をあてていくのである。

まず資本主義とは、経済の社会的再生産・蓄積の過程における「支配＝従属」構造の拡大再生産のシステムとしてとらえられる。その上で、一般階層、不安定就業階層、そして被保護層という3つの断層をもつ単純化された社会構造を想定するのである。そして、とりわけ不安定就業階層が、「支配＝従属」構造による経済的不安定や貧困化の作用を最も強く受ける基軸的階層として位置づけられていく。

この階層は社外工、臨時工、パートタイマーなどを含み全国の広い範囲にわたって存在するが、そのなかでも階層内部の末端において、貧困化の本質的な失業形態として析出されるのが「日雇労働者層」であった。ここでいう貧困化

とは、一般階層と不安定就業階層を隔てる一本の線と、さらに階層内部に引かれた複数の貧困線の間を、見えない経路を下降移動しながら最下位の社会階層へと流入していく過程を呼ぶ。

さらに、その過程をたどりつつ社会的に「転落」していく労働者の典型が、戦後に新規学卒労働者として中小零細企業に就職しそれ以降そこから排除された人々、そして農民の賃金労働兼業流出者や出稼ぎ農民であった。これらの人々は、共に東北・北海道などの荒廃していく農村を主な母体としつつ、そこから離脱し相対的な高賃金と仕事の得やすさを求めて、いつしか都市の建設労働飯場や寄せ場に流れつく。すなわち、農村における経営危機や家族解体を背景とした出稼ぎ農民らの累進的・形成そのものが、山谷の日雇労働者の主要な源泉の一つとなっていたのである。

こうして形成されていく都市の「日雇労働者層」を、加藤佑治氏は相対的過剰人口の一部として位置づける。そして「その日限りの雇用という形で雇われ、したがってその就業は概して不規則で、その階層的地位はきわめて不安定な労働者であり、主として建設、運輸、港湾、製造業、サービス業等の下層に見出される」⁹⁾として、その存在形態をさらに停滞的過剰人口の一部として規定していくのであった。その具体的な指標として、「就業の不規則性・不安定性」「労働条件の劣悪性」「賃金の低位性」をあげるのである。

とりわけ「就業の不規則性・不安定性」に伴う就労場所での酷使や蔑視、労働災害の危険性ならびに長時間拘束は、一層労働者を肉体的・精神的に消耗させ「労働過程における懶惰性」や「生活過程における恣意性」を生み出す根源となる。それが逆にまた、労働条件の一層の悪

化をもたらし、権利主張のための労働組合の組織化を困難にし、さらに低賃金を一層促進するのである。存在形態のうちに見られるこれらの特徴は、日雇労働者が資本の蓄積欲求に規定され「強制的懶惰」のもとに置かれていることの象徴的な現れなのであった。

こうして、山谷ならびにその周辺を往来する膨大な都市の「日雇労働者層」は、社会階層が高度に発達した日本の経済社会において一つの「貧困階層モデル」として位置づけられていく。あくまでも山谷は、「生命そのものの大量的消耗と浪費の機構」であり、資本に対して経済的に最も強く「従属」せしめられた階層なのである。

3. 差別問題研究

- 被差別の意味世界 -

青木秀男氏は、寄せ場のなかに日本社会における政治経済の構造的矛盾と権力性の縮図を見る。まず寄せ場労働者を「低位熟練性」「単身性」「移動性」という存在条件¹⁰⁾において、不安定就業階層からも区別された被差別の最下層として把握する¹¹⁾。その上で、都市のグローバル化、サービス経済化に伴って生じつつある、近年の寄せ場差別の変容を以下のようにとらえるのである。

第1に、寄せ場での労務手配機能が後退することで、若年層の労働者に比べ高齢の労働者が増えている。高度経済成長期にあったときの現役の日雇労働者ではなく、現在、老人や障害者などの社会的弱者が目立つようになっている。これによって世間の差別的な寄せ場イメージは、暴動などに象徴される「危険」「怖い」「土方」といったものから、野宿に象徴される「惨め」「憐れ」「浮浪者」といったものになりつつ

つある。

第2に、寄せ場労働者と野宿者との間の階層的・空間的な壁が崩壊しつつある。かつては労働者の「末路」として野宿者があったが、現在では現役の日雇労働者の多くがすでに野宿生活を強いられている。それによって、ターミナルや公園、繁華街、河川敷などにも野宿者の存在が見られるようになり、その生活形態や行動様式が都市における逸脱の対象として近年において社会問題となりつつある。

第3に、多くの外国人労働者が寄せ場に参入しており、差別のエスニック構造が多様化している。これまで寄せ場では、手配師や簡易宿泊所の経営者としてコリアンを中心とした在日外国人が多く存在した。現在では、これに中国人、フィリピン人、イラン人などの新来外国人が加わっている。彼らは全般に日本人の日雇労働者より若く、就労にも有利である。だが一方で、生活資源に乏しく在留資格も持たないが故に、しばしば雇用者から賃金不払いや契約違反による不当な待遇を受けている場合が多い。

こうした把握にもとづいて、寄せ場をめぐる差別問題をとらえるための枠組みが構成されていく。労働過程における「低位熟練性」「単身性」「移動性」という特徴は、必然的に低位で恣意的で仮宿的な生活過程を導くことになる。寄せ場労働者の存在様式は、これらの過程に対する「屈服と抗いが無い混ぜになった行為の束」としてとらえられるのである。具体的には、市民社会からの厳しい差別に対する彼らの主観的な意味づけの体系として<ミジメ>と<ホコリ>という枠組みが与えられる。寄せ場労働者の被差別の意味世界をこうした二項対立図式の中に位置づけ、双方の価値の中で揺れ動きながら何とか自己を見出そうとする存在としてとら

えていくのである¹²⁾。

さらに、西澤晃彦氏はこうした枠組みに基づき、山谷に焦点をあてながら寄せ場労働者間の固有の社会秩序を分析する。彼はまず、寄せ場を自己のそれまでの社会的アイデンティティを消去した人々を多く含む「亡命空間」と規定する。そして、このような空間を都市は道徳的逸脱や貧困を無効化するメカニズムの一つとして制度化しているのだという。「このような制度は、逸脱や貧困を不可視のものにすることで都市の道徳秩序を安定したものとして見せるとともに、逸脱者や貧困者を排除しつつ労働力化し不安定就業階層として接合するメカニズムともなっている」¹³⁾という。

そして、「過去に触れ合わない」とか「個人的な経歴について語りたがらない」といった寄せ場の日常に広がる暗黙の関係規範に注目し、その距離のとり方が逆説的に労働者たちに不可視ではあるが確かな「われわれ意識」や「共同性」を感覚させるという点をとらえていく。すなわち、労働者間のこの距離の規範が、逆に「寄せ場労働者全体を『過去がある人』として抽象化し一般化して把握することを可能とさせ」¹⁴⁾、お互いにこの集まりを共有化された一つの Kategorie とみなすことを保証するのである。

だが、こうして日々再生産され維持されていく関係規範のもとの共同性の感覚は、目に見えるものとしてはなかなか姿を現さない。だから社会病理学においては、寄せ場はしばしば匿名性の支配する「無秩序」として理解されてもきた。しかし、そのことは決して共同性が存在していないことを意味するものではない。

それが明らかに顕在化し可視化した瞬間を、西澤氏は山谷の「暴動」のなかに見る。「寄せ

場での警察と寄せ場労働者の衝突は、その社会的アイデンティティをあくまでも卑しいものと規定する者とそれに否と応える者とのアイデンティティをめぐる紛争なのである¹⁵⁾。こうした異議申し立て機能としての暴動を通して共同性のエネルギーは積極的な表現をとり、「そこにおいて、寄せ場労働者は誇りを取り戻し、またきびしい現実立ち戻っていくのである」¹⁶⁾と。

こうして被差別者としてのリアリティが解釈を通じて構成されていく。そのもとで、寄せ場は一定の磁場のもとに市民社会と対峙した固有の社会的世界として描かれる。そして労働者の共同性を語る上で、「アジール」「固有の文化地域」「コミュニタス」などの言説が、「解体地域」に対する一種の抵抗概念として提起されていくのである。

5. まとめ

- 都市下層としての寄せ場 -

以上が先行研究による言説の流れである。ではこれらの動向を踏まえ、社会学的なアプローチから「野宿者問題」をとらえるうえで、差別問題研究で議論される「都市下層」という枠組みの妥当性についてさらに検討していこう。

従来スラム研究（社会病理学）が使用してきた都市下層（社会）とは、主として戦後にスラムからドヤ街へと変化していった釜ヶ崎や山谷の現実に依拠したものであった。つまりそれは、当該社会において生活水準が相対的に下位に位置づけられる人々というだけでなく、スラムという形態の固有な集団や「異質な社会」を指す概念であったということである。

だが、こうした概念は「分析的なフレームとしてみた場合には、単に、『都市』という空間

に『下層』という階級的な特徴を接合しただけの折衷的なもの」¹⁷⁾にとどまるものであるし、アプローチの手法としても常に「解体地域」というスティグマの付与を伴った。

続く貧困研究の不安定就業階層は、高度経済成長期における日本社会の構造的矛盾をマルクス主義的経済学の立場で分析するための概念である。その時代、寄せ場は資本制的労務支配の構造に取り込まれることによって、ヤミの労務供給地として雇用調整の機能を担われる。それは予備的な労働力を必要とする資本制社会にとっては不可欠の要件でもあった。だからこそ貧困研究は、その構造的矛盾を明らかにするために相対的過剰人口のなかでも下位に位置づく停滞的過剰人口として山谷の日雇労働者を分析の対象にしたのである。

だが、この概念はバブル経済崩壊以降、急速に可視化した「ホームレス」と呼ばれる人々の存在を前に、一定の限界を露呈する。それは、すでに1970年代後半以降から始まる日本の労働市場の変容の問題と大きくリンクしている。つまり、70年代後半以降、産業構造の全般的なサービス経済化に伴って「正規雇用者」の解体が進み、パートや派遣労働者といった不安定就労層が急速に拡大していくのである。

寄せ場に焦点をあてるならば、このことは本質的な変化であることが分かる。なぜなら「不安定労働市場の拡大は、日本の資本主義が下層労働力をシステムに組み込んだ結果だと考えられる」¹⁸⁾し、その意味では、これまで寄せ場が担われていた「雇用調整のクッション」の役割を、不安定労働市場が代替しつつあるからだ。それに伴って寄せ場の労働市場の機能は衰退し、日雇労働者の多くは仕事を失って野宿生活を強いられているのである¹⁹⁾。すなわち、「雇

用調整のクッション」を寄せ場から引き継いだ不安定労働市場の多くは、それがシステムに組み込まれた労働市場であるため、もはや寄せ場のような構造的矛盾をそこに見出すことはできないのである。

こうして青木氏は階級規定による限界を踏まえ、あくまでも寄せ場労働者や野宿者の存在規定を重視する。そこで最も強調されたのが「被差別集団」であった。中根光敏氏は同氏の視点を受け²⁰⁾、欧米で議論される「アンダークラス」という枠組みをもって寄せ場をとらえることを試みている²¹⁾。その際、高度経済成長以降の日本社会と寄せ場の動向を整理し以下のように考察するのである。

第一に、欧米における工業化社会から情報化社会への構造転換は、先進国の時代背景と日本の高度経済成長期以降とで重なっている。ただし、新宿のダンボールハウスに象徴されるような最近の現象は、必ずしもアンダークラス論との整合性はない。

第二に、アンダークラス論では従来からあった移民や人種差別の問題が、労働市場の変質によってアーバン・アンダークラスという問題を引き起こしたとされている。たしかに「貧困」や「逸脱行動」も黒人社会においてより顕在化して現れている。だとすれば、日本社会において欧米の人種差別問題が何であったということが明らかにされなければならない²²⁾。

こうしたことから、アンダークラス概念を日本社会へ適応するには、さらに高度経済成長以降の労働市場全体の変化が実証されなければならない。しかしながら、産業構造の転換という視野に立てば、移民・人種問題と寄せ場の現実にはアンダークラスの問題を考えるうえで共通した都市問題や差別問題を孕んだものとして見る

ことができる。こうした観点から「アンダークラスの一部」として、やはり寄せ場の問題を抜きにしてはバブル経済崩壊以降の「都市問題」は議論できないことを強調するのである。

これを踏まえ西澤氏は、野宿者と寄せ場の日雇労働者を含むさらに包括的な下層概念が必要であるとする。そのうえで、労働者の置かれた周辺の状況を「『触れられたくない過去』や『弱み』『悩み』『負い目』を抱え込んだ人々を回収し接合する亡命空間である」²³⁾と規定し、「この下層世界への組み込みは、ジェンダーやエスニシティ、その他の烙印化した指標に基づく分類と選別を介しての特定の職種への配列というかたちで成される」²⁴⁾と述べる。

こうして都市の周辺や外部に位置づけられながらも安価な労働力として内部化された存在、排除されつつ労働市場に接合された領域を西澤氏は「都市下層」という概念で規定するのである。この概念は、日本の下層社会をめぐって「その生成過程におけるイデオロギー的な烙印づけと外部化の作用を強調し、労働者一般との断絶をみとっていること、そして、彼ら彼女らによる社会的世界の構築過程をまで視野にいれた、動的な概念」²⁵⁾であるという点に特徴がある。その意味で、80年代以降の「新しい都市問題」を射程としたアンダークラスよりも、寄せ場とのつながりで一貫して都市の下層に存在してきた人々をとらえることができるという意味で、この概念の妥当性を見ているのである。

いずれにしても、こうした青木氏以降のアンダークラスから都市下層に至る認識枠組みをめぐる議論は未だ仮説的なものであり、なお現在進行形である²⁶⁾。しかしながら、そのなかでも共通しているのは、寄せ場の日雇労働者や野宿者が置かれているマージナルな状況、そこでの

制約や排除の問題に焦点をあて、野宿者の可視化をめぐる何よりも構造的な要因を探ろうとしている点にある。それは「解体地域」というスティグマを越えられなかったスラム研究の負の遺産を乗り越えようとしてきた一定の到達点でもある。その意味では、「野宿者問題」を考える認識の枠組みとして「都市下層」という概念の有効性を確認しておきたい。

「野宿者問題」の対象設定

1. 日雇労働市場としての釜ヶ崎

釜ヶ崎とは、冒頭でも述べたように大阪市西成区の一画に位置するごく小さな地域である。現在、そこには3万人以上の住人が暮らしており、そのほとんどが日雇労働者という日本で最大規模の寄せ場（ドヤ街）である。そのなかには簡易宿泊所で寝泊りしている者、飯場にいる者、施設や病院に入っている者、野宿生活をしている者などがもちろん含まれる。

寄せ場とは、正確に言えば日雇労働者が手配師や人夫出しからその日の日雇仕事を斡旋されて労働現場へと送り出される青空労働市場のことをいう。釜ヶ崎でいえば、環状線新今宮駅の向かい側に立つあいりん総合センターの1階で、シャッターが開いた際のがらんどになっている場所のことをさす。昼間はそこに多くの労働者たちが仲間と座って談話していたり、寝ていたりなどしているが、朝になると求人用のマイクロバスやワゴン車に乗って手配師らがあらわれる。そして、その日の日雇仕事の斡旋が始まるのである。自ら仕事を求めて集まってくる労働者の方では、ここを「寄り場」と呼ぶことが多い。寄せ集められるのではなく、自らが仕事を求めて寄り集まるのだという主体的な意

味が込められている。

この街での仕事の斡旋方法は「相対（あいたい）方式」という。これは、あいりん総合センターの2階にある西成労働福祉センターが、釜ヶ崎の寄せ場で求人する業者に登録をさせ、求人条件を記載したプラカードを交付し、それをもとにして求人業者と求職者が直接雇用条件の交渉・雇用契約を結ぶことをいう²⁷⁾。

そこでの就労形態は、およそ次の3つのタイプに分けられる。1つは、朝に雇われて夕方に賃金を貰う「現金」仕事といわれるものである。毎朝、寄せ場に出ては仕事を探し、そこで日々雇われては日々解雇される文字通りの日雇である。2つめは、一定の期間雇用されるもので「期間雇用」あるいは「契約」とも呼ばれる。1週間、10日、30日というように一定の期間を区切って人夫出し飯場に泊り込み、そこから就労する。賃金は契約期間ではなく、就労日数によって支払われ、そのなかから契約期間の飯場代が差し引かれる。「契約」のなかには、さらに「出張」も含まれており、近畿圏外の人夫出し飯場や現場仕事の飯場、ホテルなどに泊り込んでそこから就労する形態をいう。それは東海・北陸地方から中国・四国までとかなり広域の範囲にわたっている。そして3つめは、就労先があらかじめ決まっていって同一業者のもとで長期にわたって就労する「直行」である。寄せ場に出向くことなく仕事現場や飯場に直接向かうことから、このように呼ばれている。形態としてはほとんど常雇と変わらないが、賃金の支払いは日々払いのことが多い。

就労先としては、依然、圧倒的に建設業である。あるデータによると、1977年以降、建設業は「現金」仕事の紹介状況のなかでも拡大傾向を示し、1996年には95.6%を占めるに至っ

ている²⁸⁾。建設業は、その構造的特質として柔軟な雇用調整機能という経済的役割を維持するが故に、景気による労働力需要の変動が大きい産業である。したがって、その末端で就労する日雇労働者は、好不況にともなうとりわけ直に就労・生活の変動をこうむることになる²⁹⁾。

さらに、職種についてはどのようなものがあるのだろうか。西成労働福祉センターの報告によると³⁰⁾、職種別構成としては土工68.3%、鉄筋工11.5%、鳶工5.4%、大工4.2%、その他の職人10.6%からなっている。技能をもった熟練労働者の存在は、釜ヶ崎の労働者全体のなかでも決して多くはなく、そのほとんどが一般土工層である。賃金日額は、1996年の「現金」仕事でみると、一般土工が13,488円、型枠大工20,510円、鳶工20,201円となっており、技術が高くなるほど賃金も上がっていくのが分かる。だが一方で、90年代後半からの建設工事の減少にともない、土工や雑役、軽作業といった非熟練層だけではなく、比較的に安定しているといわれていた大工や鳶工、鉄筋工のような熟練層にまで日雇労働の減少が及んでいる。

最後に、釜ヶ崎の労働者に対する失業保険の制度について見ておこう。労働者が得ることのできる収入は、日雇労働の日当だけである。だが、仕事にアブレ（失業）た時には、日雇雇用保険の給付金を受けることができる。正式にはあいりん公共職業安定所の日雇労働求職給付金と呼ばれるものである。これは1970年より本格的に制度化されたもので、現在では、労働者が1日働くごとに雇主が被保険者手帳（白手帳）に印紙を1枚ずつ貼っていき、前2ヶ月までに26日分以上たまれば、その月の13日から17日分まで最高7,500円の給付が受けられる。手帳の交付にあたっては、当初は簡易宿泊業者

が発行した宿泊証明をもって「管轄地区内に居住を有する」証明書としていたが、近年になって住民票の提示が条件づけられるようになったことで、手帳を持ってない労働者、失業保険を受けられない労働者が増加している。それだけでなく、そもそも求人が減少して条件を満たすだけの日数を働くことができないとか、高齢でそもそも仕事に就けないといった事情で、たとえ手帳を所持していたとしても印紙をためることができないというケースも近年増加傾向にある。

2. 階層としての「野宿者」

- 寄せ場機能の変容にともなう -

こうして釜ヶ崎は一貫して日雇労働市場としての制度的・構造的な特質を備えてきた。だが、日本資本主義社会において釜ヶ崎が日雇労働力の供給基地として万全に機能したのは、高度経済成長期までである。前節でも述べたように、とりわけ90年代に入って、景気浮上と雇用調整の役割を担ってきた建設業における日雇労働需要の後退は著しく、釜ヶ崎でも慢性的なアブレ層が急速に増加してきている。これはすなわち、釜ヶ崎の寄せ場としての機能が根本的に変容しつつあるのではないか、ということ推測させる。

青木氏は、建設業の日雇労働需要の減少によって、現在、釜ヶ崎の労務供給機能に大変な空洞化が生じつつあるとして、その背景にある要因を以下のように分析している³¹⁾。それによると、第1に、釜ヶ崎の西成労働福祉センターで紹介される仕事が、釜ヶ崎地区外から流入してきた労働者によって取られてしまうという事態が生じている。これらの労働者は、西成、大正、住之江、港などの区の飯場やマンション、アパ

ートなどに住む比較的若い不安定就労層からなる人々である。「フリーター」の若者層や外国人労働者もこのなかに含まれている。

第2に、人夫出しによる飯場型雇用の占める割合が増加している。これは釜ヶ崎の労働者が高齢化したことで、雇主にとって肉体労働者としての魅力が失われたという事情が背景にある。それによって、釜ヶ崎でそのつど労働者を雇用するやり方が減少し、人夫出しによる日雇労働者への支配がより一層強化されたのである³²⁾。

第3に、労務手配の広域化ということがあげられる。つまり、日雇仕事の手配される空間が多様化しているのである。手配師が釜ヶ崎の寄せ場で日雇仕事を斡旋する以外に、求人誌や新聞の求人欄、駅や公園で日雇労働者を雇用するやり方が増加している。そこでは「圧倒的に買い手優位のかたちで、すなわち日雇労働者をより安価な賃金、より低質な労働条件で雇用する」³³⁾という状況にまで至っている。

こうしたなかで釜ヶ崎の労務供給機能はしだいに後退していき、寄せ場での相対方式のシステムも同様に崩壊しつつある。そして事実上、釜ヶ崎は飯場などにプールされている労働者や求人誌で手配される労働者の不足を補うための労働力を調達するという形態、つまり調整弁として補助的な位置にまでその機能を弱体化させているのである。

これにともなって野宿者の階層も拡大している。島和博氏によると、とりわけ1997年の6月以降からの増加が急激で、98年に入ってから6月と7月において1日平均で1,000名以上の野宿生活が確認されている³⁴⁾。

釜ヶ崎などの寄せ場の労働者は、様々な生活保障のしくみから完全に疎外されていることが

多く、さらには、親族的なつながりにおいても、もはや具体的な相互扶助は期待できない場合が多い。そのために、アプレや病氣、怪我、高齢化といった個人的な事情がストレートに野宿という状態に結びついていく。「すなわち、寄せ場の労働者の場合は、その日常生活のありようそのものが限りなく野宿と近いそれであるがゆえに、いとも簡単に野宿へと移行するのである」³⁵⁾。

だが、このことは同時に、野宿の状態からの復帰も距離的に近いことを意味してもいる。釜ヶ崎において、もし仕事の求人数が十分であるならば、仕事に就く事自体はかなり容易である。そこで用意される仕事はすべて「履歴書の要らない職業」³⁶⁾であるから、体が丈夫であればその人の資格や学歴、保証人といったものは一切問われることはない³⁷⁾。そして、彼らの多くは、野宿とドヤ生活との間の「仕切り」がきわめて低い。すなわち、「そこでは、野宿が一つの固有の『構造』をもった生活として維持されるのではなく、あくまでも本来の生活である『ドヤ生活』に戻るまでの『一時的な』あるいは『仮の』生存の様式として、あるいは『しのぎ』の一形態として、選ばれているに過ぎない」³⁸⁾のである。

ところが現在、日雇労働者総体の高齢化や仕事量の急激な減少によって「労働力の無用化」が進行し、日雇労働者（野宿者）の釜ヶ崎からの「切断」といった事態が生じている。1日の「現金」仕事の求人数が2,000を切って減少していくという状況が続くなか、それにともなって、それまで「仕事待ち」をしていた野宿者層が、釜ヶ崎の周辺地域や大阪市内全域に「流出」しているのである。これまでにしても彼らは、「仕事を待っている」とはいえ野宿の繰り返し

によって肉体を摩滅していくなかで労働能力そのものを喪失しつつあった。それが、求人数の減少によって一層労働者に対する手配師らの選別が強まり、その選別からもれた労働者にとっては、釜ヶ崎はもはや生活の場としての意味すら失いつつある。そして、もっと「野宿のしやすい場所」をもとめて周辺地域、あるいは都市の中心部へと拡散しているのである。

3. 野宿者層の流出とその類型

現在、少なく見積もっても5,000人前後の釜ヶ崎の「現役」ないしは「元」日雇労働者が大阪市内で野宿をしている。これに対して、釜ヶ崎のなかで野宿している労働者の数は、最高でも1,400人程度（98年現在）である。したがって、最低でも常時3,500人ほどの釜ヶ崎の日雇労働者が、釜ヶ崎周辺や大阪市全域で野宿をしていることになる³⁹⁾。

島氏はさらに、野宿者層の流出の実態を類型的にとらえている。それを見ていく前にまず、野宿生活の大枠を規定する要因として次の3点にわたって注意が必要である。第1に、野宿者を生み出す主要な給源として、釜ヶ崎の日雇労働者と都市の「不安定」居住層の2つが把握されるべきであるということ。前者については先でみてきた通りだが、後者については、都市に分厚く存在する不安定就労層や都市雑業層のなかに潜在的な野宿生活の対象をみることができ

る。第2に、野宿の期間については1年以上の「長期」が40%を占め、しかも平均年齢が57.3歳といふかなりの高齢であるということ⁴⁰⁾。これは生命の維持さえ危ぶまれるような状況であるという側面と、長期化にともなう野宿生活における知識や情報、工夫、技術などの蓄積・豊

富化といった側面との両方の要素が含まれる。

第3に、半数以上がすでに過去において複数回の野宿生活を体験しているということ。これは、野宿とそうでない生活の往復が繰り返されていることを示すものであり、それを可能とさせている多様な形態の「不安定居住」や「不安定就労」の存在があることを意味する。

以上の要因を踏まえて、「過去の野宿経験」と「野宿期間」を組み合わせながら「初回・短期」型、「複数・短期」型、「複数・長期」型、「初回・長期」型という野宿のパターンを析出する。「初回・短期」型とは、今回が初めての野宿生活で、まだ日も浅いケースである。このまま長期化することもあれば、あるいは野宿の繰り返しの出発点ともなりうる。いずれにしてもこれは「野宿生活への入り口」にあたる。「複数・短期」型とは、比較的短期の野宿を繰り返すという生活の型を指している。つまり、釜ヶ崎の日雇労働者に典型的にみられる「往還型」「周期型」野宿である。

そして、この型の野宿生活は劣悪な生活環境、加齢、重筋労働などによって必然的に「複数・長期」型の野宿生活への移行を余儀なくする。つまり、野宿生活の繰り返しによる労働力の摩滅が、いつしか釜ヶ崎での就労自体を困難にし、最終的には「野宿とそうでない生活の往復」が途絶してしまうのである。この時点で、少なくとも「現役の」日雇労働者への復帰は不可能となる。すなわち、野宿生活における「初回・短期」型「複数・短期」型「複数・長期」型という遷移が、釜ヶ崎の日雇労働者の最も典型的な野宿生活の「遷移の型」なのである。

これは、さらに「釜ヶ崎での就労経験の有無」という要因を尺度に含めるとよりはっきりと見

えてくる。現在もなお釜ヶ崎での日雇労働者としての生活を背景としながら野宿とドヤ生活の間を往復しているケースと、かつては釜ヶ崎で生活していたが現在は「都市の野宿生活者」へと移行しているというケースが、野宿生活を典型的にとらえた場合に一つの主軸をなしているのである。つまり、「都市の最底辺に沈滞化し、そこからの脱出が困難な『長期』の野宿生活者は、その多くが、釜ヶ崎の日雇労働者の『普通の』生活の延長線上に、その必然的帰結として生み出されている」⁴¹⁾ということだ。そして、かつて自らの肉体で力をふるった日雇労働者が精神と肉体を摩滅していく中で漸次的に野宿生活へ移行していくという不可逆的なプロセスのなかに、実は彼らにとっての「野宿者問題」の本質があるといえるのである。

おわりに

述べてきたように、高度経済成長以降、建設・土木産業を含め日本社会の不安定労働市場は構造的な変化をきたしつつある。それに伴い寄せ場の労働者たちは、「寄せ場」という隔離された日雇労働市場のなかだけで仕事を求めて競争するのではなく、今日、多様に展開されながら拡大しつつある無数の不安定就労層とも競い合っていかなければならない状況に置かれている。

そして、現在、釜ヶ崎は日雇労働市場としての機能を徐々に弱めながら「一方では、野宿（生活）者の一大供給地となり、あるいはその中継基地ともなり、そしてもう一方では、その内部に、高齢の『元』日雇労働者を中心とした、野宿『生活』への移行さえできずに滞留する被救恤層を分厚く抱え込み始めている」⁴²⁾のであ

る。

近年において注目を集めている「野宿者問題」とは、これまで寄せ場のなかだけで隔離された問題として生じていたものが、その機能の衰退にともない野宿者があふれ出し大都市のただなかへと姿を現したことで、はじめて都市そのものの問題として語られるようになったものだといえるだろう。都市における野宿者の出現は、たしかにセンセーショナルな出来事ではあるが、それ自体は高度経済成長期以降、寄せ場内部の問題として常に潜在し続けてきたものなのである。

本稿では、「野宿者とは誰か」という問いかけに基づき、寄せ場を主題として構造的な背景をたどりながら対象把握の変遷を整理してきた。さらに、対象の認識をめぐって研究の言説それ自体がスティグマ付与に貢献してしまうことの意識化とともに、都市下層という枠組みの重要性を確認してきたのである。都市の下層に位置づけられる人々は、従来から「浮浪者」と呼ばれてきたが、この言葉は常に人間への非存在としての侮蔑の意図が含まれていた。それに対して本稿の「野宿者」という言葉は、もともと寄せ場の運動の中から形成されてきたもので、失業によって野宿を強いられているということを主張する意図が込められている。こうした流れを受けて、都市下層としての野宿者の問題を語るときも、個人の問題ではなく階層的な形成過程や就業構造を明らかにすることに心が向けられているのである⁴³⁾。

そして重要なのはその次である。こうした概念規定をふまえたうえで、市民社会のまなざしと野宿者とのあいだの関係性の断絶やそこでの不均衡を可視化し、そのすきまを丁寧に埋めていく作業がこれからの大きな課題としてあげら

れる。筆者がこれまでインタビューや参与観察から得た当事者のライフヒストリーには、階層からの転落や失業、被差別といった悲劇のストーリーだけではなく、家族や故郷、そして釜ヶ崎との意識のつながりを反芻しながら、「いま・ここ」の野宿生活を形づくっていくとする感情のプロセスがある。つまり、彼らは実態的にとらえられる日々の野宿生活を生きていくだけでなく、アイデンティティ・ワークを通じて意識において主観的に構成された現実をも絶えず生きるのである⁴⁴⁾。本稿は、こうした視点から野宿者の労働と生活を調査データにもとづいて記述していくための入り口となる作業であった。アプローチの手法や具体的なデータ分析をめぐることは、次稿の課題へとゆずりたいと思う。

注

- 1) 笠井和明「いわゆる『ホームレス』問題とは - 東京・新宿からの発信」(『寄せ場』第8号, 1995年7月) 5-14頁。
- 2) 磯村英一『社会病理学』有斐閣, 1954年, 864頁。
- 3) 大橋薫「Social Disorganization Approach について」(『社会学評論』No.12, 第3巻第4号, 1953年9月) 93頁。
- 4) 磯村, 前掲書, 865頁。
- 5) 大橋薫『都市の下層社会』誠信書房, 1961年, 46頁。
- 6) 同書, 148頁。
- 7) 大藪寿一「愛隣地区社会開発の一方向」(『都市問題研究』第18巻10号, 1966年12月) 70-78頁。
- 8) 江口英一等『山谷 失業の現代的意味』未来社, 1979年, まえがき。
- 9) 同書, 93頁。
- 10) <低位熟練性>は、単純で補助的で雑多な労働を不可避とし、「無意味な」(価値が社会から評価されない)労働と劣悪な労働条件を帰結すること。<移動性>は、不安定で周縁的な労働関係と労働条件を帰結すること。<単身性>は、多くの労働者が単身者であることを指し低位熟練性と移動性をより強めるものである、として説明されている(『寄せ場 差別と意味の社会学』青木秀男編著『場所をあける! 寄せ場/ホームレスの社会学』松籟社, 1999年, 33頁)。
- 11) 青木氏の「被差別集団」としての寄せ場労働者論は、社会学の理論的な系譜としてはベッカーらによって展開されたレイベリング・セオリーの視点と枠組みのもとに設定されたものである(青木秀男『寄せ場労働者の生と死』明石書店, 1989年参照)。
- 12) <ミジメ>とは、被差別世界の即時的・状況服従的・諦念的な意味づけの志向性であり、<ホコリ>とは、被差別世界の対自的・状況克服的・積極的な意味づけの志向性をさしている。青木氏はこの2つの概念が、寄せ場労働者の生を意味付ける究極的な集合心性であるとしてとらえている。そしてこれらの意味づけにおける葛藤なかで、寄せ場労働者は「労務者」と「労働者」という2つの自画像の中で揺れ動くことになる。また、それに対応して寄せ場自体も「生き地獄」から「アジュール」へとその意味を変えていくのである(青木, 前掲書, 1999年, 36頁参照)。
- 13) 西澤晃彦『隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー』彩流社, 1995年, 91頁。
- 14) 同書, 110頁。
- 15) 同書, 111-112頁。
- 16) 同書, 112頁。
- 17) 中根光敏「都市下層と寄せ場」1(『部落解放ひろしま』29, 1997年) 84頁。
- 18) 中根光敏「都市下層と寄せ場」2(『部落解放ひろしま』30, 1997年) 68頁。
- 19) 社会政策からアプローチする岩田正美氏は、こうした不安定就業階層からもこぼれおちていく人々を「不定住的貧困」という概念でとらえている。これは、様々な経済的困窮といった状況とあわせて、日常における自由や自立を確保する枠組み自体を失うという「私生活の二重の解体」を含んだ概念である。不安定就業の概念に代わって「浮浪」や「ホームレス」という言

- 葉で語られるような、あくまでも都市の最底辺の人々に焦点をあてることが意図されている（岩田正美『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房、1996年参照）。
- 20) 中根氏は青木氏の規定を踏まえ、さらに寄せ場労働者の「関係」規定として 家族親族関係からの乖離・排除 雇用関係からの乖離・排除 社会保障からの乖離・排除 被差別性、をあげている。
- 21) ここで依拠されているのは主にJ・H・モレンコフとM・カステルの議論であるが、日本の寄せ場に適用して検討する際に主要な論点とされているのは次のような枠組みである。すなわち、彼らは工業化社会から脱工業化＝情報化社会への先進資本主義社会の象徴的な変動をニューヨークに見ているが、そうした産業構造の転換が都市の労働市場をフォーマルな情報部門とインフォーマルな労働集約的な部門とに分断すると考える。さらにこの二つの階層はライフ・スタイルを異なったものにし、相互の間でのコミュニケーションを全く欠如させたまま都市の二極分化を引き起こす。その結果、都市は中間的な職業層を失ったままインフォーマルな労働集約的な部門の職業層から80年代以降の「新しい」アンダークラスの問題を生み出す、と考えるのである（Mollenkopf, John H. and Manuel Castells (eds.), *Dual City: Restructuring New York, New York*; Russel Sage Foundation, 1991参照）。
- 22) これに関しては、日本の野宿者の多くがなぜ単身で高齢の男性によって構成されているのかという問題について考えることが鍵となる。とりわけ日雇労働市場として寄せ場が活性化していく1950年代から70年代の行政対策に焦点があてられる。具体的には、当時の寄せ場の家族世帯に対する生活指導、児童対策、青少年対策を含んだ環境浄化整備対策である。これによって高度経済成長を遂げていく70年代初頭までには、寄せ場はスラム的な様相から単身男性を中心とした日雇労働者の街へと変貌していくのである。こうして寄せ場自体からは次世代の労働者は再生産されないことになり、主として他の労働市場からの失業層の流入のみによって補填される街となっていった。
- 23) 西澤晃彦「都市下層としての野宿者 - 『ホームレス問題』とその構造的背景についてのノート」(『現代社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』文部省科学研究費報告書、1997年) 81頁。
- 24) 同上。
- 25) 同上。
- 26) 青木秀男氏は、都市下層を「都市の『最底辺』」にあって階層的・空間的に隔離された人々をいう。すなわち、苛酷な収奪と差別の要件が同時に課せられた『社会外』の人々の謂である」と定義している(「寄せ場は何処へ」青木秀男編著『場所をあける！ 寄せ場／ホームレスの社会学』松籟社、1999年、276頁)。ここでも外部への排除と下層化の過程が考慮されている。
- 27) そもそも手配師や人夫出しというのは、労働者の直接の使用者ではない。建設業者や工場主などから注文を受け、日雇労働者を仕事場へ送りこむことで紹介料を取って(ピンハネして)いる代行業者にすぎない。こうした存在を介した斡旋の方法は、職業安定法や労働者派遣事業法では明白に違法であるとされている。だが、行政は建設業の重層下請機構と間接労務支配のシステムにおいては、その歴史性・特殊性を顧慮して例外的に認めているのである。相対方式は、こうした釜ヶ崎での雇用形態の実態を容認する求人登録制度として1976年に導入されたものである。ただし、その登録は必ずしも徹底されているとはいえず、いまだ違法の私設職安といったものの存在が後を絶たないのが現状である。
- 28) 連合大阪あいりん地区問題研究会『日雇労働者・野宿生活者の現状と連合大阪の課題』、1998年11月30日、11頁。
- 29) 例えば、所謂バブル経済崩壊以降、日雇労働の求人は減少の一途をたどっていたが、阪神淡路大震災の起きた95年には一時的に増加し、求人は延べ126.0万人の紹介があった。労働者も大量に震災の災害復旧工事へと動員されている。だが、それ以降、再び求人は減少に転じ、97年

- には75.8万人にまで落ち込んだ。たった2年間で60.2%の水準にまで減少していることになる(同上)。こうした雇用状況の変動がそのまま釜ヶ崎労働者の生活の不安定性を規定しているのである。
- 30) 西成労働福祉センター『1996年度の事業報告』1997年。
- 31) 青木秀男『現代日本の都市下層 寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店, 2000年, 41頁。
- 32) 具体的には, 人夫出しが寄せ場で「良質の」労働力を「顔づけ」によって選別し, 飯場に困り, そこから需要に応じて労働者を工事現場に送り出すという形態が一般化しつつある。とりわけ80年代後半から大阪周辺部に巨大な飯場がいくつも形成され, これによって人夫出し業者が相当数の日雇労働者をプールしておけるようになってきている。こうしたことから, すでに飯場内において, 一定程度, 日雇労働力の需給調整が可能となっているのである。
- 33) 青木前掲書, 42頁。
- 34) 島和博『現代日本の野宿生活者』学文社, 1999年, 89頁。
- 35) 同書, 99頁。
- 36) 見田宗介「まなざしの地獄」『現代社会の社会意識』弘文堂, 1979年。
- 37) また居住においても, お金さえあるなら, 簡易宿泊所や飯場, ビジネスホテルなどでは, 身元保証や頭金・敷金といったものは一切必要とされない。さらには, 民間のボランティア組織による野宿者への支援活動や相談, 食事などの提供も行われており, これらも野宿からの復帰をはかるための手段として利用可能なものである。
- 38) 島前掲書, 100頁。さらに, 彼らは少なくとも主観的な意識のなかでは, 野宿をあくまでも一時的なものと考えており, 常に「仕事待ち」の状態にある。釜ヶ崎の日雇労働者の野宿は, 野宿とドヤ生活の周期的な繰り返しというかたちで, 生活構造そのもののなかに組み込まれている。その意味で島氏は, 釜ヶ崎における野宿を「往還型」野宿, あるいは「周期型」野宿という言葉でとらえている。
- 39) 同書, 112頁。
- 40) ここでは, 大阪市の浪速区, 天王寺区, 中央区, 西区などで野宿をしている人への聞き取り調査(236名)と市内の更生・救護施設で生活している釜ヶ崎の「現役」もしくは「元」日雇労働者への聞き取り調査(58名)に基づいている。
- 41) 同書, 159-160頁。
- 42) 同書, 126-127頁。
- 43) 青木氏は, 不況などの経済的な要因だけではなく, 対象の階層的出自や就労状況の問題を含んだ社会的な形成過程を範疇において「野宿者」という概念規定を行っている(青木秀男『現代日本の都市下層 寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店, 2000年, 103-104頁)。
- 44) 構築主義的な視角から質的データによってアプローチした研究としては現在以下のものがある。山口恵子「新宿における野宿者の生きぬき戦略 野宿者間の社会関係を中心に」『日本都市社会学学会年報』第16巻, 1998年。山口恵子「『こじき』と『こつじき』の間にて 新宿における野宿者のアイデンティティ構築過程」『社会学論考』第19巻, 1998年。

参考文献

- 青木秀男「ドヤ街研究をめぐる社会学の社会学」『広島修大論集』第22巻第1号, 1981年6月。
- 青木秀男「『ドヤ街』の社会学的概念めざして」『広島修大論集』第22巻第2号, 1981年12月。
- 青木秀男「簡易宿泊所街のサブカルチャー」『広島修大論』第24巻第1号1983年6月。
- 青木秀男「『寄せ場』研究の諸問題」日本寄せ場学会『寄せ場』第1号, 1988年3月。
- 青木秀男『寄せ場労働者の生と死』明石書店, 1989年。
- 青木秀男「『先進』と『後発』の遭遇 釜ヶ崎と猪飼野の場面から」『市政研究』第103号(春季号), 1994年4月。
- 青木秀男編『場所をあける! 寄せ場/ホームレスの社会学』松籟社, 1999年。
- 青木秀男『現代日本の都市下層 寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店, 2000年。

- 鮎川潤「ドヤ街・寄せ場の社会学的研究序説」『金城学院大学論集』社会科学編第31号, 1988年。
- 磯村英一『社会病理学』有斐閣, 1954年。
- 磯村英一「都市問題としてのスラムとドヤ」『都市問題研究』第18巻第12号, 1966年12月。
- 磯村英一『人間にとって都市とは何か』NHKブックス, 1970年。
- 磯村英一「社会福祉の圏外の人々 - あるドヤ街の話」『生活と福祉』創刊号, 1956年。
- 磯村英一, 木村武夫, 孝橋正一編『釜ヶ崎 スラムの生態』ミネルヴァ, 1961年。
- 今川勲『現代棄民考』田畑書店, 1987年。
- 岩田正美『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルヴァ書房, 1996年。
- 岩田正美『ホームレス / 現代社会 / 福祉国家 「生きていく場所」をめくって』明石書店, 2000年。
- 岩田正美『現代都市と「ホームレス問題」』『市政研究』第124号(夏季号), 1999年7月。
- 江口英一『現代の「低所得層」』上・中・下, 未来社, 1978年。
- 江口英一等編『山谷 失業の現代的意味』未来社, 1979年。
- エドワード・ファウラー『山谷ブルース <寄せ場>の文化人類学』洋泉社, 1998年。
- 大阪社会学研究会編「釜ヶ崎の実態」上『都市問題研究』第13巻第5号, 1961年5月。
- 大阪社会学研究会編「釜ヶ崎の実態」下『都市問題研究』第13巻第6号, 1961年6月。
- 大橋薫「Social Disorganization Approach について」『社会学評論』No.12, 第3巻第4号, 1953年9月。
- 大橋薫『都市の下層社会 社会病理学的研究』誠信書房, 1961年。
- 大橋薫「社会病理(地域病理)現象としてのスラムとドヤ」『都市問題研究』第18巻第12号, 1966年12月。
- 大橋薫, 大藪寿一『社会病理学』誠信書房, 1966年。
- 大橋薫, 近江哲男編『都市社会学』川島書店, 1967年。
- 大藪寿一「釜ヶ崎の変貌」『都市問題研究』第17巻第10号, 1965年10月。
- 大藪寿一「愛隣地区社会開発の一方」『都市問題研究』第18巻第12号, 1966年12月。
- 大藪寿一『現代社会病理学理論』幻想社, 1982年。
- 大藪寿一「社会計画とスラム」『都市問題研究』第19巻第9号, 1967年9月。
- 小倉利丸「<労働力>商品化と福祉政策」日本寄せ場学会『寄せ場』第1号, 1988年3月。
- 笠井和明「いわゆる『ホームレス』問題とは - 東京・新宿からの発信」『寄せ場』第8号, 1995年7月。
- 加藤佑治『不安定就業労働者 増補改訂』御茶の水書房, 1991年。
- 釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎 歴史と現在』三一書房, 1993年。
- 小関三平「スラム現象の基本的視点」『都市問題研究』第18巻第12号, 1966年12月。
- 澤野雅樹「淫らな好奇心 おもに『浮浪者に関する調査』における」日本寄せ場学会『寄せ場』第8号, 1995年7月。
- 島和博「就労状況からみた釜ヶ崎労働者の現在」『市政研究』第103号(春季号), 1994年4月。
- 島和博『現代日本の野宿生活者』学文社, 1999年。
- 下田平裕身「雇用変動時代の中の寄せ場」日本寄せ場学会『寄せ場』第1号, 1988年3月。
- 杉原薫, 玉井金五『増補版 大正・大阪・スラム もうひとつの日本近代史』新評論, 1996年。
- 社会政策学会『日雇労働者・ホームレスと現代日本』御茶の水書房, 1999年。
- 助川義寛「スラムと保健」『都市問題研究』第17巻第4号, 1965年4月。
- 園部雅久「ホームレス調査をめぐる方法とデータ」『日本都市社会学年報』第14巻, 1996年。
- 田巻松雄「社会的『底辺層』と『われわれ』の関係性についての一考察」『名古屋商科大学論集』第39巻第2号, 1995年3月。
- 土田英雄「ドヤ・ドヤ街・ドヤモン」『都市問題研究』第18巻第12号, 1966年12月。
- 中川清『日本の都市下層』勁草書房, 1985年。
- 中根光敏「『寄せ場』研究の批判的社会学」『解放社会学研究』第2号, 1988年。
- 中根光敏「『野宿者』襲撃と『寄せ場』差別」『ソシオロジ』第33巻2号, 1988年9月。
- 中根光敏『社会学者は2度ベルを鳴らす』松籟社,

- 1997年。
- 中根光敏「都市下層と寄せ場（1）」『部落解放ひろしま』第29号，1997年。
- 中根光敏「都市下層と寄せ場（2）」『部落解放ひろしま』第30号，1997年。
- 中根光敏「都市下層と寄せ場（3）」『部落解放ひろしま』第31号，1997年。
- 中根光敏『寄せ場をめぐる差別の構造』広島修道大学総合研究所，1993年。
- 中根光敏『寄せ場』差別の現象学 排除のカテゴリー化作用と市民社会のロジック』好井裕明編『エスノメソドロロジーの現実 せめぎあう<生>と<常>』世界思想社，1995年。
- 中根光敏「“第一次暴動”を基軸とした釜ヶ崎をめぐる社会問題の構成 行政対策を中心として」『解放社会学』第10号，1996年。
- 仲村祥一「釜ヶ崎と社会科学徒の反省」『思想の科学』第34号，1961年。
- 仲村祥一『社会体制の病理学』汐文社，1967年。
- 西澤晃彦「寄せ場労働者の社会関係とアイデンティティ」『社会学評論』No.163，第41巻第3号，1990年12月。
- 西澤晃彦『隠蔽された外部』彩流社，1995年。
- 西澤晃彦「地域という神話 都市社会学者は何を見ないのか？」『社会学評論』No.185，第47巻第1号，1996年6月。
- 西澤晃彦「都市下層としての野宿者 - 『ホームレス問題』とその構造的背景についてのノート」『現代社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』文部省科学研究費報告書，1997年。
- 西成労働福祉センター『西成地域 日雇労働者の就労と福祉のために』，1997年。
- 西成労働福祉センター『1996年度の事業報告』，1997年。
- 平井正治『無縁声 日本資本主義残酷史』藤原書店，1997年。
- 平川茂『『暴動』から見た寄せ場の文化』『市政研究』第103号（春季号），1994年3月。
- 平川茂「<問題>としての日雇労働者とその意識」日本寄せ場学会『寄せ場』第2号，1989年5月。
- 船津衛・宝月誠編『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣，1995年。
- ふるさとの会編著『高齢路上生活者 - 山谷・浅草・上野・隅田川周辺その実態と支援の報告』東峰書房，1997年。
- 福原宏幸「『釜ヶ崎労働者の現在』を考える」『市政研究』第103号（春季号）1994年4月。
- 福原宏幸「ホームレスと雇用政策」『市政研究』第124号（夏季号），1999年7月。
- H・ブルーマー（後藤将之訳）『シンボリック相互作用論』勁草書房，1995年。
- 見田宗介『現代社会の社会意識』弘文堂，1989年。
- 八木正編『被差別世界と社会学』明石書店，1996年。
- 矢島正見「囲い込まれた街，横浜寿地区ドヤ街」『現代の社会病理1』垣内出版，1986年。
- 安保則夫『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム 社会的差別形成史の研究』学芸出版社，1989年。
- 山口恵子「新宿における野宿者の生きぬき戦略 野宿者間の社会関係を中心に」『日本都市社会学年報』第16巻，1998年。
- 山口恵子『『こじき』と『こつじき』の間にて 新宿における野宿者のアイデンティティ構築過程』『社会学論考』第19巻，1998年。
- 山田富秋・好井裕明編『排除と差別のエスノメソドロロジー』新曜社，1995年。
- 連合大阪 あいりん地区問題研究会『日雇労働者・野宿生活者問題の現状と連合大阪の課題』日本労働組合総連合会大阪府連合会，1998年11月。
- Becker, Howard S, *Outsiders: Studies in Sociology of Deviance*, New York: The Free Press, 1963. 村上直之訳『新装 アウトサイダーズ ラベリング理論とはなにか』新泉社，1994年。
- David A. Snow and Leon Anderson, "Down on Their Luck" *A Study of Homeless street people*, Berkeley: University of California Press, 1993.
- Jenks, Christopher, *The homeless*, Cambridge: Harvard University Press, 1994. 岩田正美訳『ホームレス』図書出版，1995年。
- M. Spector and J.I. Kitsuse, *Constructing Social Problem*, Menlo Park, CA: Cummings Publishing Company, 1977. 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築 ラベリング理論をこえて』マルジュ社，1992年。

Roger Burrows, “*Homeless and Social Policy*”,
London : Routledge ,1997.

Talmage Wright, “*Out of Place*”, New York:
SUNY,1997.

An Examination of Preceding Approaches to Yoseba in Order to Establish a Framework for the “Nojukusha” Problem

Shinpei NISHIDA *

Abstract: The number of “nojukusha”, homeless street people, has increased in cities in Japan, especially during the past decade. This paper aims to examine the “nojukusha” problem from the viewpoint of sociology. First, I survey the preceding approaches to yoseba, which have wrestled with the problem of social discrimination and poverty in order to overcome the stigma of community disorganization. Secondly, I examine the decline of yoseba and changes in the industrial structure in Japan from the latter half of the 1970s and day laborers at yoseba fall into homelessness. Finally, this paper points out that the problem of “nojukusha” has been related to yoseba since high growth of the Japanese economy, and should be approached from an underclass framework.

key words: yoseba, social disorganization, pauperization, discrimination and meaning, nojukusya, underclass

* Graduate student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University